

## 保育者の保育者効力感と心理社会的要因に対する過去の遊び経験の影響

渡部 努  
(兵庫教育大学大学院)

嶋崎 博嗣  
(兵庫教育大学)

### 【目的】

今日、幼稚園や保育所において、様々な遊びを展開することが望まれている。しかし、教員の経験不足により、適切な指導が行われていないという指摘がなされている。

そこで、本研究は保育者の過去の遊び経験が保育にどのように反映しているかを検討することを目的とした。具体的には、Fig. 1のような仮説モデルを設定し、保育者効力感に対する過去の遊び経験の影響を明らかにすることである。

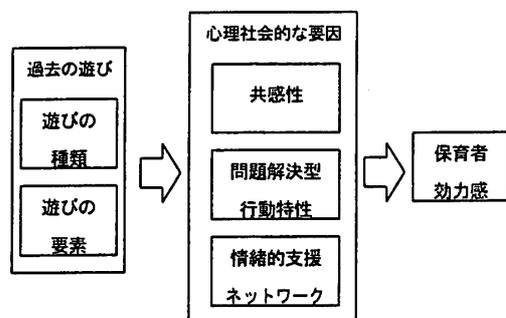


Fig. 1 仮説モデル

### 【方法】

#### 1. 調査方法

公立・私立の幼稚園教諭および保育士を対象に質問紙調査を行った。機縁法により幼稚園および保育所に対し調査依頼を行い、承諾を得た園において、後日、質問紙を送付した。質問紙は回答後、一括して返送するよう依頼した。尚、質問紙は無記名自記式とした。

#### 2. 調査対象

公立・私立の幼稚園教諭および保育士を対象とした。配付数 608 部、回収数 511 部、回収率 84.0%であった。

#### 3. 調査期間

2003 年 10 月中旬～10 月 31 日。

#### 4. 調査内容

以下の 6 つの観点から質問紙を構成した。

##### ① 過去の遊び経験

『幼児の遊び百科』(1994)、『3 世代遊び場図鑑』(1999)、岸本(2002)の調査項目を参考に、70 項目の具体的な遊びを抽出した。抽出した遊びについて、「子ども期」、「養成校期」、「就職後」を設定し、それぞれの時期について、どの程度経験したことがあるかについて 4 段階評定で回答を求めた。

##### ② 遊びの中の要素

中村・深田(1993)の遊びの中の要素 20 項目を用いた。「花や草で遊んだ」「遊びながらハラハラ、ドキドキした」などの質問項目より体験した遊びの中の要素を 4 段階評定(0～3 点)で回答を求めた。

##### ③ 共有経験尺度

角田(1994)によって開発された過去の経験に基づいて他者理解に通じる個人の共感性を測定する共感経験尺度の下位尺度である共有経験尺度を用いた。質問項目について 7 段階評定(0～6 点)で回答を求めた。

##### ④ 問題解決型行動特性尺度

宗像(2002)によって開発された問題解決型行動特性尺度を用いて、目の前にある課題や問題に対して、積極的・効果的、現実的に対処しようとする行動特性を持ち合わせているかどうかを測定した。質問項目について 3 段階評定(0～2 点)で回答を求めた。

##### ⑤ 情緒的支援ネットワーク尺度

宗像(2002)によって開発された情緒的支援ネットワーク尺度を用いて、友人および職場内において、自分の周りに情緒的・心理的な支えになってくれる友人が存在していると、本人がどれくらい認知しているのかを測定した。質問項目について 2 段階評定(0～1 点)で回答を求めた。

##### ⑥ 保育者効力感尺度

三木・桜井(1998)らが作成した保育者効力感尺度において、「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」を測定した。質問項目について 5 段階評定(1～5 点)で回答を求めた。

本研究で用いた尺度の因子分析および信頼性分析の結果は以下の通りである。

Table 1 各尺度の因子分析および信頼性分析

尺度	項目数	第1因子固有値	寄与率 (回転後の因子数)	信頼性 係数 $\alpha$
遊びの中の要素	20	2.806	44.8 (4)	.9027
共有経験	10	3.136	59.4 (2)	.9105
問題解決型行動特性	10	1.503	37.0 (3)	.6843
友人の情緒的支援ネットワーク	10	2.229	42.4 (2)	.8133
職場内の情緒的支援ネットワーク	10	2.585	48.7 (2)	.8780
保育者効力感尺度	10	5.263	52.6 (1)	.9147

(Varimax法による回転)

【結果と考察】

1. 各時期の遊び経験と遊びの中の要素との関連

各時期の遊び経験と遊びの中の要素との相互関連性を検討するため、相関分析を行い、ピアソンの積率相関係数を算出した (Table 2)。

Table 2 各時期の遊び経験と遊びの中の要素との関連

	子ども期	養成校期	就職後
養成校期	.363 **		
就職後	.413 **	.318 **	
遊びの中の要素	.519 **	.191 **	.270 **

\* p<.05 \*\* p<.01

その結果、すべての項目間において有意な相関が認められた。つまり、子ども期に多くの遊び経験を保有しているものは、その後の養成校期、就職後においても多くの遊び経験を保有しているのである。

また一方、過去に多くの遊びを経験している者は、「友達と力を合わせて遊んだ」、「友達とけんかした」など遊びが内包する様々な要素をより多く経験していることが明らかになった。

2. 過去の遊び経験と心理社会的要因および保育者効力感との関連

過去の遊び経験が心理社会的要因および保育者効力感にどのような関連をもっているかを検討するため、相関分析を行い、ピアソンの積率相関係数を算出した (Table 3)。

Table 3 過去の遊び経験と心理社会的要因・保育者効力感との相関

心理社会的要因	過去の遊び経験			合計	遊びの中の要素
	子ども期	養成校期	就職後		
共有経験	.295 **	.142 **	.159 **	.248 **	.327 **
問題解決型行動特性	.135 **	.088 **	.200 **	.185 **	.137 **
友人の情緒的支援ネットワーク	.121 **	n.s.	n.s.	n.s.	.157 **
職場内の情緒的支援ネットワーク	.190 **	n.s.	n.s.	.096 *	.146 **
保育者効力感	.115 **	n.s.	.328 **	.219 **	.231 **

\* p<.05 \*\* p<.01

その結果、心理社会的要因および保育者効力感と過去の遊び経験のほとんどの項目において、有意な相関が認められた。特に子ども期においては、すべての項目間に有意な相関が認められた。つまり、過去に多くの遊びを経験することによって、共感性が高まり、問題解決型行動特性が上がり、情緒的支援ネットワークを認知しやすくなっていることが推察される。さらに、保育者効力感においても高まることを推察される。

3. 過去の遊び経験、心理社会的要因および保育者効力感における共分散構造分析

次に、過去の遊び経験の心理社会的要因に対する影響および保育者効力感に対する因果的な影響を構造的に検討するため、共分散構造分析を行なった。「過去の遊び経験の質と量」、「共感性」、「問題解決型行動特性」、「情緒的支援ネットワークの認知」、「保育者効力感」を潜在変数とし、潜在変数間における因果的な影響力の検討を行なった (Fig. 2)。

その結果、各時期の遊び経験と遊びの中の要素を観測変数に持つ潜在変数「過去の遊び経験の質と量」は、潜在変数「共感性」( $\beta = .44$   $p < .0001$ )、「問題解決型行動特性」( $\beta = .23$   $p < .001$ )、「情緒的支援ネットワークの認知」( $\beta = .32$   $p < .0001$ ) にプラスの影響が認められた。また、潜在変数「問題解決型行動特性」( $\beta = .51$   $p < .0001$ )、「共感性」( $\beta = .10$   $p < .05$ ) は潜在変数「保育者効力感」に直接的なプラスの影響力が認められた。「情緒的支援ネットワークの認知」については「保育者効力感」に直接的な影響力は認められなかった。しかし、潜在変数「情緒的支援ネットワークの認知」は、「問題解決型行動特性」( $\beta = .17$   $p < .05$ ) にプラスの影響が認められ、「保育者効力感」に対する間接的な影響力が認められた。結果として、「過去の遊び経験の質と量」は「保育者効力感」にプラスの影響が認められたのである。

これらのことから、過去に多くの遊び経験を保有することにより、共感性や問題解決型行動特性が高められ、情緒的支援の認知を促進することが推察される。つまり、過去の多様な遊び経験の保有が心理社会的な要因の発達に貢献しており、それらを媒介として保育者効力感が高まるのである。

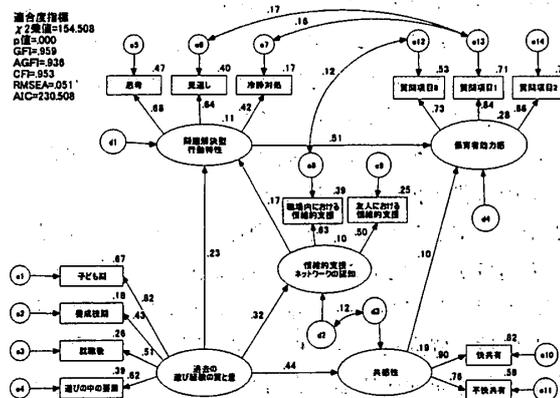


Fig. 2 過去の遊び経験の質と量が心理社会的要因、保育者効力感にもたらす影響に関するパスダイアグラム